

1 テーマ設定の理由

H児は、被転導性・衝動的等、多動児特有の行動がみられる。しかし、自分の行動については意識して行っていることが多い。つまり、分かっているのだが興奮が押え切れないといった状態である。自分自身をコントロールする力の弱さからくる衝動的な行動（ドミノの項参照）がほとんどで、これを少しでも減らして生活を円滑にさせる必要がある。H児に取り組んで2年目になる。少しずつではあるが教師の指示に従え、興味のあることに集中できるようになってきた。本年度は、さらに行動の安定を図りながら、満足感の持てる仕事を与え、落ち着いて生活できるようにさせたい。 ㊦-1

2 対象児について

・H：N ・男 ・昭和50年10月生（10歳） ・生育歴 正常出産 出産時体重3480g 言語発達が遅い（現在も文形は正しいが内容は分裂） 多動・乱暴で特殊学級に適應できず2年生の時本校に編入 ・病歴 5歳時、多動症候群（自閉あり）と診断され、以来現在も調養中 ・家族構成 父母 姉 兄（小6） 本人 父は漁師で殆ど家にいない。

・K式発達検査（S60、7、16実施）による指導のめやす

- (1) 順番・見通しを持たせる指導を続ける。
- (2) 自我形成を促すため、皆の中で励ます。
- (3) 対人場面・課題場面での過剰緊張を緩和する。
- (4) 言語発達では述語の意味理解に留意しイメージ化を図る

3 指導の方針

基本的には、前年度の研究を引き継ぎ指導方針とした。中でも『生活のパターン化』は本年度も重点目標とし、さらに、『不必要な刺激を減らして緊張を少なくする』・『集中力・持続力を増すために満足感の持てる仕事を与える』の2項目を付け加えた。

㊦-1 本校研究紀要第6集19ページ参照

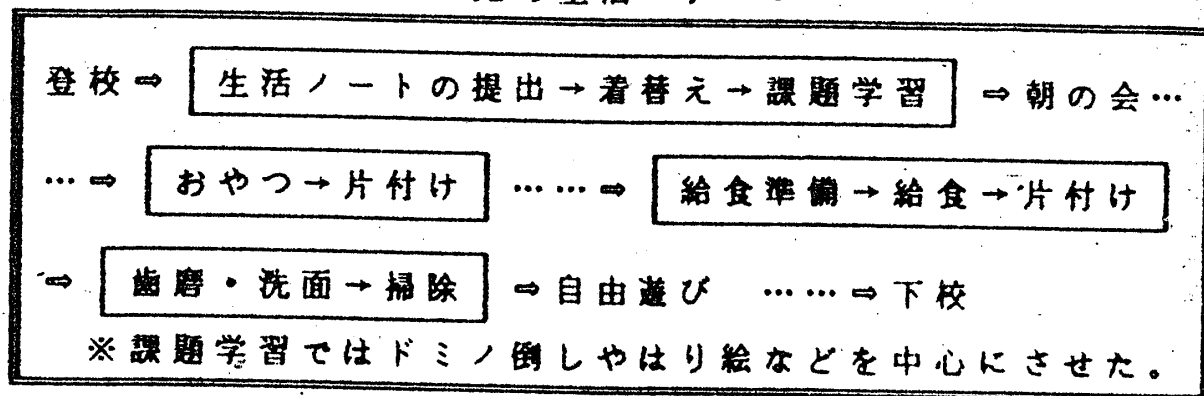
4 指導の実際

指導に当っては、特に前頁(2)の『仕事を終えたら、皆の中で励まし、誉める』に留意した。

(1) 生活のリズムを身につけさせる

学校生活の中には、何をしてもよいかわからない時間がかなり多く、H児は、この時間に衝動的な行動が多い。することが分からないので不安になっているようでもある。そこで、H児の生活パターンを下図のようにした。□内は、自分自身でする活動の流れを表わす。

H児の生活パターン



現在、□内は、少なくとも自分で出来るようになり、生活にもメリハリが出てきたように感じられる。□内は学校にいる時間の44%に達する。当面は□を広げ、一日の生活パターンをより安定したものにさせ、将来は□以外の時間を自律的に過ごせるようにさせたい。

(2) 緊張を少なくさせる

(A) ドミノ遊び

精神的に安定させる方法として、何か一つのことに取り組ませるためドミノをさせてみた。N児の大きな問題に、衝動的、破壊的行動がある。H児にとってこの行動は強ければ強いほど良く悪いと知りつつしてしまう。このような行動には、③物を投げる ④物をぶつけて壊す。⑤人を押す、叩く、蹴る。⑥突然、大声(奇声)を出す。⑦⑧~⑩の状態を見たり聞いたりして喜ぶ。などがあり、原因と考えられるものとして次の場合が観察される。

㉔ 叱られて腹がたったとき。㉕ 嬉しくて興奮したとき。㉖ 体調が悪いとき。

乱暴な行為に対し、担任としては、たとえ叩かれ蹴られても、心が落ち着くまで優しくなだめて待つことにしている。しかし、体は大きくなり、力も強くなってくるので、今から少しずつ自力でこの衝動から脱する手立てを講ずる必要がある。H児は、幸いドミノ倒しを好む。この遊びは、㉕の、「物をぶつけて壊す」グループに属するものである。次々と動きが伝わって倒れる様子や、最後に「ボタン」と音がして倒れる所に興味を引き付けられる様である。壊したり、壊れたりするのを喜んだりすることは、社会的に望ましい行動ではないが、他人に被害がなく、しかも創意工夫し集中できる遊びである。指導の過程は以下に示す通りである。

① まっすぐに並べる。(自分でする) ② カーブを作って並べる。(自分でする) ③ 渦巻状に並べる。(ドミノのかわりにカセットを倒す) ④ 枝を作って並べる。⑤ 枝を多く作る。(最後のドミノが多いのでしない) ⑥ 少し高低をつけて並べる。(台からカセットが落ちるようにする) ⑦ 積木のように高くする。(作っては全部壊す) ⑧ 最後を二段、三段にして倒す。

以上が一学期間のドミノ遊びである。ドミノでこれだけ遊べると言うことは、友達と争う時間を少なくすることと、破壊的な行動を押える一つの方法ともなって、単なるなだめすかし以上のものと思われる。これらは、教師が付いての実践であるが、さらに、自分からドミノをして落ち着かせたり、自分の意志で行動がとれるようにさせたいと考えている。

(B) はり絵

二学期の中頃より、一人で遊べる遊びを広げることがをねらって「はり絵」を教えた。小さな根気のいる仕事である。「物を作りあげる」ということで集中させたいと考えているが、今は効果を観察している段階である。

(C) できたことが実感できる仕事をさせる。

自分はできると思える仕事を与え、「できたらほめる」の縁

り返しによって、『何かをした』という気持を味わわせ、担任が喜んでいと感じれば、これが自信となり、情緒も安定し、緊張も緩和されるのではないかと考えた。

〔例1〕友達の世話（手をつないで、友達を連れていく）

教室移動は、必ず誰かの手をつないで行くようにさせた。特にどこへ行ってよいのか解っていないA子の手をつながせ、めんどろを見させた。4月はいやいやするといった状態であったが、7月は「あれ？」と言うと解ってきた。自分の仕事と思うようになったのである。10月には、A子や、T男の移動が任されるようになった。

〔例2〕ランチルームの掃除

6月、初めて掃除をいいつけられた日、『自分だけ』とでも思ったのか、チリトリとほう木を投げ飛び出した。それ以後「掃除をさせる→ほめる」を繰り返す。

9月、時々、『したでー』と、うそを言うこともあるが「これは自分の仕事」という自覚がかなり見られるようになった。掃除の際、そして掃除後、他学部の先生にほめられるのをとても喜んだ。

12月、まだまだ定着とは言えないが、食器の片付けを終えると、自分から、ほう木とチリトリを持って来るようになった。

5 まとめ

生活のパターン化による行動の安定と、情緒を安定させる目的で、以上のような実践を行ってきた。ドミノ、はり絵、仕事などは、まだまだ教師の指導が必要で、指導の手をゆるめるとすぐに崩れてしまう。しかし、ジュータンの片付け、おやつ準備など一日の生活を見ると、自分から進んでしようという姿も多く見られ、かなり適応しているように見受けられる。今後も、長い期間を要すると思われるが、根気強く、工夫を加えつつ指導を続けていく考えである。